

国際
シンポジウム

21世紀の農業を考えよう

『日本のコメの将来』

第二回おだて「米の日」が八月十八日開催されました。

サン・アベリティーズ大館、中央公民館では「稲作農業の歴史探訪」「すし大喰い大会」など多彩なイベントが繰り広げられ、文化会館では「日本の米の将来」と題した初の国際シンポジウムが開かれました。アメリカ、韓国代表もパネリストとして参加し、熱い米討論が展開されました。(シンポジウムの内容は、紙面の都合で一部割愛しています)

〈コーディネーター〉

■勝部 領樹氏 NHKエンタープライズ

〈パネリスト〉

■ジェームス・ボーン氏 米国カリフォルニア州アジア貿易投資事務所代表

■玄 義松氏 韓国農協中央会代表

■石倉 皓哉氏 全国農協中央会代表

■竹井 三子氏 全国消費者連盟代表

■藤原 美佐保氏 大館市農業生産者代表

最前線リポート

コメ自由化攻勢の背景

勝部



勝部氏

八月十八日を「米の日」としたユニークな発想は、米どころ大館ならではのものと思います。今年の年末がガットの期限ということも含め、外圧が強まっている中で、日本の米の将来を考えることは、非常に重要なことだと言えらると思います。さて、なぜ日本に外圧が迫ってくるのか、その背景から話してみたいと思います。

二つ目は、E.C.、アジア各国で農産物の生産量が増えてきたこと。その結果アメリカの輸出は減る傾向にあります。何とか輸出を増やしたいと願う中で、アメリカは日本の米を標的に入れているということです。

三つ目は、円高ドル安という為替相場の変化です。これによって日本国内の農産物価格が、ドル計算する海外のものとは比べてどんどん高くなるんですね。あれほど急激な円高がなければ、日本の農産物は割高だと、安いものをもっと買えと、言われずに済んだかも分かりません。四つ目は、外国から日本がど



ボーン氏

う見えるかということです。自給率が下がる一方の、世界一の輸入大国ですね。もう一つにはアメリカがよく言いますが、日本はスーパーパワーに近いマーケット、もつと日本へ輸出できるという感じを持っています。そして最後に付け加えたいのは、ガットのウルグアイ・ラウンドです。アメリカはE.C.との対立で、本来脇役の米を自由化することで、国内米価の上昇を期待しているようです。

日本では、食文化を大事にしたいんだ、このままやっていきたいと思いますが、世界的にもあれ、米にとって求められるものは「安全」「安定」「安心」が基本です。高い米といいますが、国民所得に占める主食代という点で他と比較すれば、その議論は当たらない面もあります。しかし、生産者としてコストダウン、良質米を追求する努力を続けることは当然だといえます。

今回のこの一時だけのことでしてではなく、年を通して、常に生産者と消費者との合意を求めて、話し合いを重ねていきたいと思います。

おだて市

市長メモ

「米の日」



No.38

八月十八日、第二回「米の日」を通じて考え合いました。特に「国際シンポジウム」には、県内外から約千人の参加を頂き、国際的観点で討議を重ねながら多くを知ることができました。

農業や米に対する意見は様々です。その違いを主張し合うだけではと心配しましたが、事実に基づく主張・討論が展開され、時間は不足でしたが内容の豊かなものになったと思います。

ともあれ、米にとって求められるものは「安全」「安定」「安心」が基本です。高い米といいますが、国民所得に占める主食代という点で他と比較すれば、その議論は当たらない面もあります。しかし、生産者としてコストダウン、良質米を追求する努力を続けることは当然だといえます。